

研究報告：「厳修派改革創始期におけるドミニコ会と学位問題」

東京大学大学院西洋史学専攻博士課程

日本学術振興会特別研究員 DC2

梶原洋一

yoh-kaji@nifty.com

<http://yoh-kaji.blogspot.com/>

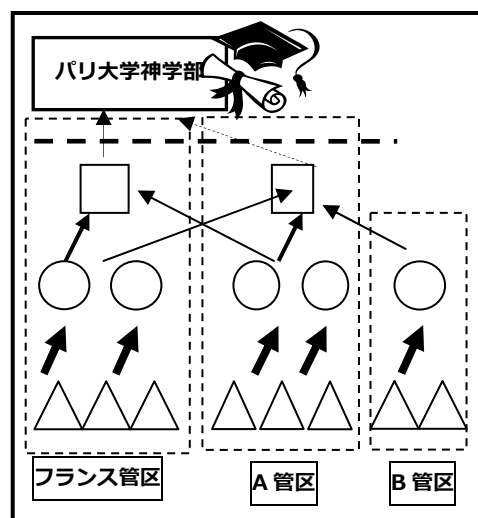
報告要旨

説教や異端の論破を使命としたドミニコ会が、神学的知識の継承に自覚的に取り組み、階層性を持った学院ネットワークを構築したことはよく知られている。しかしながら、この学院組織と大学の関係、とりわけ大学の授与する学位が、ドミニコ会士にとっていかなる意義を持ったのかは、いまだ十分解明されていない。本報告では、大学の神学部が大幅な増加を見た14世紀半ば以降、とりわけ15世紀、ドミニコ会が会士の学位取得を管理する制度を次第に構築したことを念頭に置き、こうした仕組みが確立する直前、すなわちドミニコ会で厳修派 Observants 改革が創始される時代における学位を巡る展開を論じた。

はじめに、当該の時代までのドミニコ会士と学位の関係、特に彼らが学位を求めた動機について整理を行った。大学学位はドミニコ会士の活動にとって本来不要なものだったが、神学マギステルの肩書が修道会内での高い地位、さらに説教など俗人との交流において有利な立場をもたらしたために重視された。それゆえ、ドミニコ会士の学位取得の欲求は高まる一方であり、特に14世紀後半以降には大学神学部が増加し、学位を得る機会が大きく広がる。このようにドミニコ会と大学学位の関係が変質する中で構想されたのが、修道会の学位取得管理政策であった。

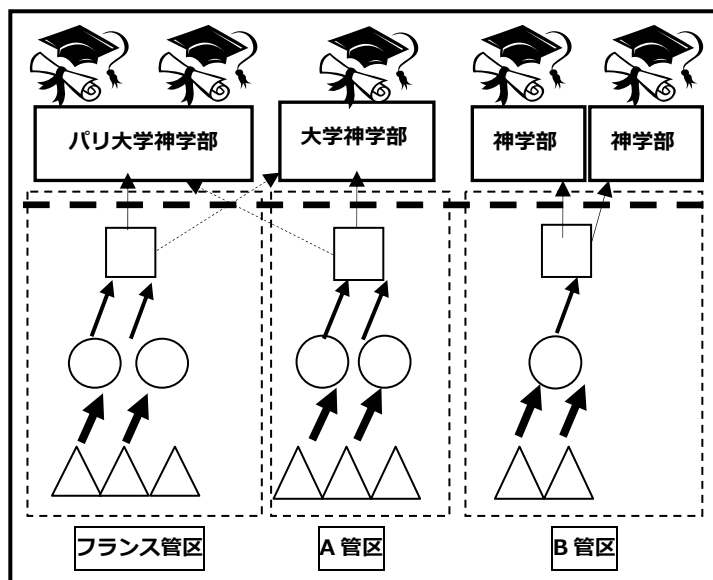
これは、学位取得を目指すべき会士を、ドミニコ会の総会 capitulum generale が直接かつ独占的に任命する仕組みを指し、15世紀はじめ以降、総会記録の中に確認される。その柱とされた原則は、①任命の条件として所属管区の管区会議による推薦、②同じく総会による任命、③指定大学における一定期間の在籍、である。こうした措置の背景として、学位取得のチャンスが増加したことによる取得者の質のばらつき、取得を巡る不正の横行などが先行研究において指摘され

☆ドミニコ会学院網(14世紀半ばまで)



- : 最高神学学院 studium generale
- : 管区学院 studium provinciale
- △ : 修道院学校
- ↑ : 修道士の移動 (太さは人数規模)

てきたが、同時代のドミニコ会制度史・政治史・思想史という具体的文脈と関連付けたうえでの考察はいまだ不十分である。本報告ではこうした視点に基づく研究の一環として、カプアのライムドウス（任 1380-1399 年）時代、つまり大シスマにより修道会が分裂し、さらには厳修派改革の口火が切られた時期であり、上記の管理制度が確立する直前の時代における、修道会内部での権限を巡る駆け引きを仔細に検討した。



☆ドミニコ会学院網と学位取得規制（15世紀）

※太い点線が「学位取得管理」

ライムドウスは、大シスマ勃発後アヴィニオン教皇を支持した当時

の総長に反発するローマ教皇派のドミニコ会士から、総長に選出された。これにより、ドミニコ会は二派に分裂した。ローマ派を率いる彼は、「改革」修道院を設置するなど、厳修派改革の創始者と見なされる一方で、大学学位に対する態度は妥協的であり、このため修道会イングランド管区との激しい対立を招いた。

イングランド管区は従来から、オクスフォード・ケンブリッジ大学での学位取得に対する総長の干渉に反発していたが、ライムドウス時代にはより強硬な態度を取り、教皇が直接授与した学位を承認しない、総長から任命を受けた学位志願者の排除を試みるなど、激しく抵抗した。かかる姿勢は、地域主義の現れである一方で、学位授与の健全性を確保しようとする「適性化」志向の結果でもあった。すなわち、格式の高い大学神学部を領域内に抱えるイングランドの会士たちは、大学学位の内実について総長よりもよほど強いこだわりを有していた。同じドミニコ会の中でも、学位に対する見解は決して一様ではなかった。

イングランド管区がかくも激しく抵抗しえた事実は、対立総長であるライムドウスの政治的立場の弱さを示す。1397年の総会は、彼の地位が一際脅かされる中で開かれたが、ここでは学位取得に関する総会の強い権限が主張され、総長の干渉の排除が追求された。ここからわかるのは、学位「適性化」の志向が修道会内部で一定共有されていたこと、そして総長の権限を抑制し、学位取得許可を総会に一本化することが、学位取得管理体制の成立条件だったことである。

以上から、総会による学位取得管理の成立に際して、総長の権限を制限することが主要な争点であったことが明らかになった。かかる制限が可能になった要素として、修道会内で一定共有された、総長の恣意に対する反感と、総長ライムドウスの立場の弱さを指摘した。今後はこうした干渉抑制の努力が15世紀に入って直面した限界、さらに世紀後半の総長権限再強化などについて、独立的な厳修派「修族」の台頭など制度的・政治的・思想的文脈と関連付けつつ考察することが必要だろう。